

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	つくばだいがくふぞくこうとうがっこう				②所在都道府県	東京都
26—30	①学校名	筑波大学附属高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全日制普通科高校。男女共学。1学級の生徒数は約40人、1学年は6学級、全生徒数は約720人。男女比はほぼ1:1。	
普通科	238	247	240	0	725		
⑥研究開発構想名	小・中・高・大が連携した課題解決によるグローバル人材の育成						
⑦研究開発の概要	本校の教育方針を継続しつつ、平成26年度からは意欲的な生徒を対象に課題解決によるグローバル・リーダーの育成を目指す。平成27年度以降は、平成26年度取組に加え、毎週土曜日を授業日とし、そのうち1～2時間を「SGH スタディ」と称する総合的な学習の時間として、全生徒を対象にグローバル・シチズンの育成を目指す。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際性豊かなグローバル・シチズンの育成。 世界で活躍し社会を牽引するグローバル・リーダーの育成。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>《現状の分析》グローバル人材が持つべき能力ごとに、現在の本校の取組を分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 深い専門性と幅広い教養…レベルの高い教科教育とバランスの取れた教育課程。 問題を解決する能力…問題解決型の授業。 コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力…話す・聞く重視の英語教育他。 主体性と協調性…生徒の自主性を重視した行事、委員会活動、部活動。 異文化を理解する柔軟性と日本人としてのアイデンティティ…多様な人々を認める環境。 高い語学力…少人数生徒の指導と第二外国語(ドイツ語、フランス語、中国語)の授業。 議論し交渉する能力…生徒の自主性を重視した行事、委員会活動、部活動。 地球規模の視点…海外研修や相互短期留学。 <p>これらの取組の充実のため、SGH活動の時間を確保し、少人数を対象にした授業が必要。</p> <p>《研究開発の仮説》グローバル人材が持つべき能力は、問題解決学習の中で育成できる。</p> <p>課題の発見→調査・研究→グループによる議論→解決法の発表・提案</p> <p>(3) 成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> 管理機関と協力してSGH専用ホームページを立ち上げ、課題研究テーマや研究開発成果についてディスカッションする「つくば版パブリックコメント」の欄を設ける。平成27年度以降は、企業や関係行政機関へ成果を提言し、パブリックコメントを外国へ拡張。 SGH研究協議会で成果を公表するとともに、他のSGH校の生徒や担当教師の交流会を開催し、課題や成果について情報交換を行う。 各教科の研究会、全附属高等学校部会研究発表大会(10月中旬)、本校研究大会(12月初旬)、筑波大学附属学校研究発表(2月中旬)等において、SGHに関する成果を公表する。 					
		<p>(1) 課題研究内容</p> <p>社会的に関心が高く、生徒が自ら課題を見つけやすいものとして、次の3つを設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> オリンピック・パラリンピックにおける諸課題 「フェアプレイ精神の実現の方法」「アマチュアリズムとプロフェッショナルリズムの問題」「オリンピックと戦争の影響」などの課題を取り上げて調査研究する。 地球規模で考える生命・環境・災害 「遺伝子組み換え」「地球温暖化防止」「捕鯨と日本文化」「気候変動」など今日的な課題を取り上げて調査研究する。 グローバル化と政治・経済・外交 「戦後の国際経済の歩み」「国際的な資金の動きの現状と課題」「日本企業の海外進出の国内外の経済への寄与」などを取り上げて調査研究する。 <p>(2) 実施方法・検証評価</p>					

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>1. オリンピック・パラリンピックにおける諸課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学及び附属 11 校での「オリンピック教育」と連携して講義や施設見学を行う。 ・「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」へ参加する生徒には、イングリッシュルームへの参加を義務づけ、専門家による課題の指導や英語及びプレゼンテーションのスキルトレーニング等を行う。 <p>2. 地球規模で考える生命・環境・災害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語による発表や討論のために、イングリッシュルームへの参加を義務付け、専門家による課題の指導や英語及びプレゼンテーションのスキルトレーニング等を行う。 ・課題の研究成果については英語による論文作成、発表を基本とし、取組への意欲、実践ともに優れた生徒には海外でのフィールドワーク・討論等の機会を与え内容を深める。 <p>3. グローバル化と政治・経済・外交</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題に応じて専門家による講演・講義・指導を実施する。 ・「模擬ビジネス交渉」「模擬国連」により交渉能力や議論する能力を向上させる。 <p>上記のようなグローバル人材育成プログラムの有効性に関しては、筑波大学と連携して、「ポートフォリオ」や「国際的資質質問紙」などを活用し、科学的に評価・検証を行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>特になし。ただし、平成 27 年度以降は、1 学年と第 2 学年は毎週土曜日を授業日にして、1～2 時間の「SGH スタディ」と呼ぶ「総合的な学習の時間」を置く。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行 — 課題解決型のフィールドワーク — ・ICT 環境を活用した情報検索、プレゼンテーションの指導 ・模擬国際ビジネス交渉、模擬国連 ・課題研究に関連する新しい試みの検討 ・「SGH スタディ」を利用した筑波大学への高大接続入試の検討 <p>このうち、課題研究に関連する新しい試みの検討としては、グローバル人材育成のための有用なプログラムの開発、新たな海外研修先の開拓、新たな短期留学先の検討がある。高大接続入試に関しては、「SGH スタディ」に筑波大学が指定科目を開設し、授業担当者が協議した上で、希望学群への推薦入試を検討する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等</p> <p>特になし。ただし、平成 27 年度以降は、1 学年と第 2 学年は毎週土曜日を授業日にして、1～2 時間の「SGH スタディ」と呼ぶ「総合的な学習の時間」を置く。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学との連携による外国人留学生の活用。 ・外国人生徒の受け入れ数の増加。特に HANA 高校との相互短期留学について検討する。 <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>管理機関と協力して SGH 専用のホームページを立ち上げ、課題研究テーマや研究開発成果についてディスカッションする「つくば版パブリックコメント」を開設する。</u> ・SGH 専用ホームページには、課題研究のテーマ等が共通する SGH 校や関係する企業、行政機関とマッチングするための「SGH の架け橋ポータルサイト」も開設する。また、ホームページの開設にあたっては、英語の併記やアクセス権等も工夫する。 ・事業開始当初に SGH 連絡協議会を開催し、各校の研究課題や研究開発を進めるための体制等について情報交換を行う。年度途中には、SGH 校に共通する課題解決の方法を検討し提案・実施する。年度末には課題解決の方策を話し合う研究協議会を開催する。 ・スタンフォード大学の Reischauer Scholars Program と連携して、英語でオンライン授業を行い、本校生徒が SGH の一環として受講することを試みる。引き続き SGH50 校全体に広げる案、また日米の高校生の合同授業案も検討中である。 <p>※管理機関の筑波大学附属学校教育局は、教育長の他 11 名の指導教員と 68 名の事務職員を有し、東京駅から地下鉄で 15 分の好立地にあり、幹事校としての支援体制は整っている。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>附属小・中・高と大学の連携により、定例的に「四校研」と呼ばれる研究会を開いている。これを利用して、小・中・高一貫したグローバル人材の育成に取り組む。</p>

ふりがな	つくばだいがくふぞくこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	筑波大学附属高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）		24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	72人
	SGH対象生徒以外:	人	35人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: ボランティア活動などを推奨し、SGH以前との比較で倍増させ、全校生徒の約1割をめざす。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	180人
	SGH対象生徒以外:	人	150人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: すでに全校生徒の約20%が該当し、これ以上の増加は難しいが、約1/4まで増やすことをめざす。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	65%
	SGH対象生徒以外:	%	55%	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: すでに全校生徒の半数以上が該当し、これ以上の増加は難しいが、約2/3まで増やすことをめざす。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	20人
	SGH対象生徒以外:	人	10人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 従来は学校外の活動を十分には推奨してこなかった。今後は積極的に参加を促し倍増をめざす。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	30%
	SGH対象生徒以外:	%	25%	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: すでに全校生徒の1/4が該当するが、これをさらに3割程度まで増やすことをめざす。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	66%
	SGH対象生徒以外:		%	66%	%	%	%	%
目標設定の考え方:すでに全校生徒の約2/3が該当し、これ以上の増加は困難であるので、この水準を維持する。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	3人
	SGH対象生徒以外:		人	1人	人	人	人	人
目標設定の考え方:本校卒業生は、大学や大学院で海外に出る例が多いため、学部では数名程度で十分と考える。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	10%
	SGH対象生徒以外:		-	-	%	%	%	%
目標設定の考え方:本校の教育活動全体に占める課題研究の比重を考えると、1割程度が妥当かと考える。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	12人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	人
目標設定の考え方:日本の大学生の留学比率に鑑み、海外指向の強い本校卒業生では約5%の留学をめざす。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	人		人	人	人	人	人	40人
目標設定の考え方: 現時点で学校経由で海外研修に参加する生徒がすでに約30名おり、10人増をめざす。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	人		人	人	人	人	人	50人
目標設定の考え方: 1～2年生480人中、1割の生徒に参加させることをめざす。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	校	3校	校	校	校	校	校	5校
目標設定の考え方: 現時点で本校と連携をしている学校3校に加えて、新たな連携先を開拓することで、5校をめざす。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	人		人	人	人	人	人	60人
目標設定の考え方: 1～2年生各10講座として、各講座に平均して3回、外部人材に参画していただくとして計算した。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	人		人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方: 1～2年生各10講座として、各講座に少なくとも1回、外部人材に参加していただくとして計算した。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	人		人	人	人	人	人	20人
目標設定の考え方: 従来、学外での活動を十分には促進してこなかったことから、今後は積極的に参加を促す。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	人	30人	人	人	人	人	人	40人
目標設定の考え方: 入学試験「帰国生」枠(約6名)の数は維持し、相互短期留学の人数の増加を検討する。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	回	回	回	回	回	回	3回
目標設定の考え方: 関東地域のSGH校、全国でのSGH校による研究発表、本校研究大会での発表の3回を予定する。								
外国語によるホームページの整備状況								
i	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
		△						○
目標設定の考え方: 可及的すみやかに英語によるHPを整備し、その後、他の外国語によるものも考えていく。								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方:								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)		725	0	0	0	0	0
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							